

# 教 仁 名 聞

第 186 号 毎月発行  
(発行日) 2026 年 3 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号・番号 17810-7-259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 仏と語る人

## 佐々木蓮磨

過日逝去されたながたに 齋な 含雄氏の

厳父に齋經丸という名師がおられました。師は一度大谷派の宗務総長をつとめられたことがありましたが、各地から上山する聞信徒に接近して、常に念仏もろとも法談を交わされたので、一般の同行からは生き仏のように敬慕されたのでありましたが、本山の役員たちにケムタがられ、遂に職を辞して自坊に帰り、専ら自信教人信の道を進まれたのでありました。あるとき、一人のインテリが師を訪ねて言うには「先生のような学徳兼備の方が、こんな辺鄙へんぴな地に埋まっておられるのは惜しいことであるから、京都の地に出て、大きく教化活動をして頂きたい」と。すると師はニッコリ笑って「あなたのようなことを言ったら私に寺を出るよう勧められる人は沢山あるのですが、私はそうした勧めには動かされたいようになりませんでした」と答えられたので、今の人はまた重ねて「何故に寺を出て広く法をお説きにならないのですか」と追求すると、師が言われるには「私は自坊に

帰ってから毎朝法話をしているのですが、だんだんと参詣の人も増えて、今ではそうした同行をあとにして他所に行く気持ちはなれません。私は毎朝この寺に参詣してくる同行の下駄の足音を聞くのが何よりの楽しみで「と答えられたそうであります。なんとという尊い気持ちでしょうか。」  
師は毎朝三時頃起床し、みずから御仏飯を炊き、本堂の掃除をすまされると六時頃になるのです。その頃から参詣の同行が集まってくるので、師は外陣から同行の先達となつて一緒におつとめをし、おつとめが終ると自己の領解を語り、法悦を述べられるのが常であつて、一年三百六十五日、ほとんど休まれることはなかつたと言つておつとめです。  
師は晩年そうした生活で終始し、大正十年の冬、齢五十才で法話中に脳溢血で倒れ、往生の素懐を遂げられたのであります。まことにな 齋な 師こそは真宗の寺院住職の典型と言つても過言ではないでしょうか。  
師の滅後、稻葉円成師が師の

徳を慕つて師の寺に参られたとき、師のお育てを受けた同行連中が集まつて、いろいろと亡き師の追憶談を交わして稲葉師に聞かせたそうですが、その中で稲葉師が最も心に深く感じた話は、一人の同行が「先師が毎朝早く起きて本堂のお掃除をし、静かに仏前に端座して念仏しておられる姿を見ていると、先師と本尊とが本当に話を交わしておられるように見えた」と語つたことであつたそうです。  
真宗では蓮如上人の御指示のように、「木像より絵像、絵像より名号」というのが当然の見方でありませぬ。これは真宗における獲信は名号のいわれを聞く以

外にない、という教義から言われるのでありまして、ここに真宗が偶像崇拜の迷信に陥らない理由もあるわけですが、ひとたび信に徹したときは、名号より絵像、絵像よりは木像という段階ができてくるのではないのでしょうか。  
信心とは物を見る一つの見方とも言えます。その見方が明らかになれば、仏は具体的な形となつて現れて下さるのは当然でしょう。齋師が木像の前に端座して合掌しておられる姿が本当に木像と話し合つておられるように見えたというは、師の眼には木像はそのまま転じて真仏となつて現れて下さつたものと思ひます。まことの信は仏から与えられ仏を生かす心となるのでしよう。  
〔信心清話〕より〕

## 《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日 (水)

午前十時始  
午後二時始

法話 住職 土井紀明

(どなたでも自由におまいりください)

# 清沢満之先生に学ぶ

⑪

みちた海のなかに遊ぶ心地を得た。それは親鸞聖人の大恩と高德のおかげであって、どう

## 『清沢満之先生の言葉』

や。  
(現代語訳)

して片々たる感謝や嘆美でそれにこたえることができようか。

(今村仁司訳)

我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るるときは、我が世に処するの道閉づ。

我、他力の救済を念ずるときは、我、物欲の為に迷わさるること少く、我、他力の救済を忘るるときは、我、物欲の為に迷わさるること多し。

我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するところ光明照らし、我、他力の救済を忘るるときは、我が世に処するところ黒闇覆う。

嗚呼 他力救済の念は、能く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し。我は実に此念によりて現に救済されつつあるを感ず。若し世に他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし。然るに、今や濁浪滔々の暗黒世裏に在りて、夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得るもの、其大恩高德、豈区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならん

私が他力の救済を念ずるときは、私が世に処する道が開けてくる、私が他力の救済を念じるのを忘れるときは、私が世に処する道は閉ざされる。

私が他力の救済を念ずるときは、私は物欲のために迷わされることが少なく、私が他力の救済を忘れるときは、私は物欲のために迷わされることが多い。

私が他力の救済を念ずるときは、私が世に処するところを光明が照らしてくれる、私が他力の救済を忘れるときは、私が世に処するところを暗闇がおおう。

ああ、他力の救済の念は、私を迷妄転倒や苦悶の娑婆から脱け出させて、悟達安樂の浄土に入らせてくれる。私はじつにこの念によって現に救済されつつあることを感じる。もし世に他力救済の教えがなかったとすれば、私はついに迷乱と悶絶とを免れることはないだろう。しかるにいまや私は、濁った波がとうとうとおしよせる暗闇の世の中にあつて、はやくからすがすがしい風がふきわたって光明に

この清沢満之師の言葉は念仏の信心の讃歌といえます。

ここで教義を語るといふよりは、お念仏のありがたい働き(功德)をほめ讃えている歌です。ですからこのまま読むだけでお心が知られますので、一つ一つを説明することもいらないと思います。あえてこの讃歌のお心を味わってみたいと思います。

真宗ではアミダ仏にであつて、一つには死ねば浄土に生まれて仏様にしていただけるといふ利益(これが一番大きな利益です)とこの世でいただく利益があります。この清沢師の讃嘆される利益はこの世での生活の上でいただく利益のありがたさを歌われたものです。

真宗の救いは「阿弥陀仏にであうこと」のほかにはありません。ここに焦点を絞って聞法念仏することがまず基本

です。ただ漠然と真宗のお話を聞くのではなく、的をしぼって聞くのです。

さてここで清沢師はアミダ仏に出あつての人生生活の上で、私はかようにお念仏のありがたさを感じ、万人の救いをあきらかに説いてくださつた親鸞聖人の大恩を大変感謝しておりますというのがこの歌の趣旨です。

そこでまず「我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るるときは、我が世に処するの道閉づ」といわれますが、この言葉の中にここでいおうとされていることがすべて示されています。少し解説してみますと、「他力の救済を念じる」とはお念仏を称え聞く、ということ。お念仏を聞くとは、今、声となつてまで現れてくださるアミダ仏のお働きのありがたさを聞く、知るといふことです。

アミダ仏のお働きは今、声となつて現れ、「仰せ」となつて聞かせてくださるのです。ここがすでにありがたいではありませんか。私を超え、私を包んでいるはかりないのちであり、光であるアミダ仏が、私に一つとなつて、私を抱いていてくださっていること。

それを知らずに迷い、妄想し、自分の思いに振り回されているこの私に南無阿弥陀仏の声とまでなつて、私に喚びかけてくださる。これによって私にアミダ仏の大悲のいのちの中にいることを知らせてくださるのです。

南無阿弥陀仏とは、南無は「まかせよ、たのめ」であり、阿弥陀仏は「摂取して捨てない、タスケル、ヒキウケル」といわれ、このように絶対的に決定したもう大悲の仰せです。これを「阿弥陀仏の勅命」と申します。この勅命は「ヒキウケル」という端的な仰せであるとともに、今ここに私とともにいてくださること、いわば「ここにいて」と告げ知らせてくださるお勅命です。

それを聞いて「ああありがたい」「私を抱いていてくださる」というこの一念(一瞬)です。これがファイファイと出てくださる、それが生涯続くのです。生涯続くのですが、反面このありがたい事実をよく忘れる私でもあります。私はいつもアミダ仏と共に生きているという感覚で生きているのかという、しょっちゅう忘れていっているのです。それどころか自我の思いで生きているのです。自我の思いとは「ああな

りたい、こうなりたい」「ああなつては困る」「こうなつては困る」という自分の都合やプランを先立てて、自分の都合を中心に生きようとしているのです。このような自我中心の生活におちいつているのが私たちの現実生活なのです。そこに思い通りになれば喜び、うまくいかなかったら嘆く、そういう悲喜苦楽しているのが私たちです。

そういう「自分の思い、欲求」を満足させようと、あれを求め、これを追いかけて思い煩い、不安な毎日の中で、「他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け」るのです。「他力の救済を念ずる」とはお念仏の仰せを聞くことです。そうすると、大なり小なり困っている私にこの世に「処する道開け」るのです。なぜ開かれるのでしょうか。それは思いを超えて動いている大いなるいのちの働きにそのつど出あうからです。このいのちの働きは無碍であつて、行き詰まらない。行き詰まるのは自分の思いであり、観念であり、計画であり、計らいです。

「いのち」とどちらが根本であり、基本であるかという点、いうまでもなくいのちです。思つたり考えたりするのは、いのちのはたらきがあつての上のことです。このいのちのはたらきによつて刻々と動いている、いわば生かされているのです。このいのちの大いなる働きは、私の「思い」が行き詰まつても、それにお構いなしに活動しているのです。生かされているのです。こういういのちに私が運ばれていて、歌にしてください。さつた先達に藤原正遠師というお方がおられました。師の歌に、

一・生きるものは 生かしめ  
たもう 死ぬるものは 死  
なしめたもう 我に手のな  
し 南無阿弥陀仏

二・あや雲の 流るるごとく  
わがいのち 永遠のいのち  
の 中を流るる

三・来し方も 亦行く方も  
今日の日も 我は知らねど  
み運びのまま

また佐々木蓮磨師は  
一。困る「やつて行けぬ」と  
言いながら現に生きています。  
これ他力と仰ぐほかなし。

さて、次に「他力の救済を念ずるときは、我物欲の為に迷わさること多し」とあります。これはアミダ仏にであらうと、人生に充足感が与えられて、物足りないという思いがなくなつてきます。そうすると「いろいろな物を手に入れて自分の欲求を満たしたい」ということが少なくなつてきますから、自分の「ああなりたい」「コレがほしい」という思いにさほど振り回されなくなりません。それゆえ「他力の救済を念ずるときは、我が世に処するところを光明照らし、我が世に処するところを黒闇覆う」といわれるのです。アミダ仏に出あう、それは私を包んで運んでいるアミダ仏のはたらきに触れることであつて、そうすると自分のいのちの底が明るくなります。そのことを「我が世に処するところに光明照らし」といわれるのでしよう。逆にアミダ仏を離れると人生生活全体が暗くなるのは当然であります。

く我をして迷倒苦悶の娑婆を脱して、悟達安樂の浄土に入らしむるが如し」というのは、アミダ仏のあたたかいのちの働きにであらうと、そこに安らぎと喜びを感じますから、苦悩の娑婆の中にあつて、自分の居らしていただける場があたえられます。それはちようど「娑婆を脱して安樂浄土の中にいるようだ」といわれるのです。アミダ仏の働きと安樂浄土とは本質が同じですから、アミダ仏に触れる人は浄土の働きに触れている人といえます。このことを「浄土に入っているようだ」とまで清沢師はいわれるのでしよう。曇った目で、空間はどんよりにしていても、雲と雲のあいだの切れ目から明るい青空を垣間見るように、南無阿弥陀仏のお心を聞く一念のところには大悲のまことに出あい、はればれとした風光を感じる一念がありえましよう。それをここで「夙に清風掃々の光明海中に遊ぶを得る」といわれるのではないでしようか。

このように、真宗の信心の利益を讃えておられるのです。そして「他力救済の教なかりせば、我は終に迷乱と悶絶とを免れざりしなるべし」といつて、もしこの教えにあわな

《春季彼岸会》

三月二十二日（日）

午後二時始まり

法話 念佛寺住職

ければ人生は苦悩の淵に沈んでしまったのであるうけれども、ありがたいことにお念仏に出あつて、アミダ仏の光明に照らされ、まもられ、みちびかれ、人生が開かれて明るくなつたのは親鸞聖人が教えたくださる本願他力の教えのおかげであると清沢師は、親鸞聖人のご恩はとても感謝しても感謝しきれないといわれるのが、「区々たる感謝嘆美の及ぶ所ならんや」の言葉です。

さて、今まで述べた私に「清沢満之はこうなのだが、お前はどうかなのだ」といわれたら「光明海中に遊んでいる」とまでは到底いえない私であるといわざるを得ません。しかしそういう風光に連なる道をアミダ仏に手を引かれて歩んでいるとはいえそうです。

(了)

# 念仏往生と清沢満之

最近清沢満之師の話をする人が多い。以前はもっぱら念仏往生を語っていました。そうすると、小生の法話を長年聞いてきた人からは、私の話が以前と違うように感じたり、あるいは私の信心が違ってしまったように感じたり、あるいは異安心になつてしまつたかのように思われる人がいます。しかし、私の居り場は少しも変わっていません。

ではなぜ念仏一つでいいのに清沢満之をいわねばならぬのかということですが、実は念仏往生の願である「他に救いなし、助からぬ汝をこそ、我が名を称えるばかりでタスケル、そのほかに何もいらぬい、そのままを引き受けける」という大悲にであつたら、『歎異抄』の第一章に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなり」と信じて念仏申さんとおもいたつころの起るころとあづけしめたもうなり」で、アミダ仏の撰取の働きにおさめ取られるのであります。

そこにアミダ仏と離れない我が身が知らされる。それが撰取不捨の利益で、これがこの世におけるお念仏の救いであります。

そうするとアミダ仏は大悲の親様であり、アミダ様は慈悲大悲のはたらきであることが知られますが、さらにアミダ仏に寿命無量の徳（はたらき）があることが知られます。アミダ仏は救いの働きとしては光明無量ですが、そのもとに万物をして万物たらしめている大いなるいのちのはたらき、すなわち寿命無量のはたらきがあり、それがアミダ仏の本質でもあります。

この寿命無量のはかりなきいのちがアミダ仏だということとは私の存在（いのち）もアミダ仏のはかりなきいのちを離れてはない。もつといえ、アミダ仏は私のいのちを成立させている働きであることが自然に知られます。

こういう見方は信心の智慧からのおのずと知らされます。信心はまことを知る智慧でもあります。そうするとアミダ仏は万人・万物の存在の根源

ということが知らされますと、清沢満之師が

「自己とは他なし 絶対無限の妙用に乗託して、任運に法爾に、この現前の境遇に落在せるものすなわちこれなり」

とわかることが自然に無理なく了解されます。この清沢師の言葉は清沢師の根本的な旨であつて、それを端的に述べたものです。そこからいろいろな清沢師の言葉が生まれています。そういうことで、信心の智慧から清沢師の言葉がよくわかるようになったのです。けつして念仏往生の信心の内容と違つたことをいつているのではありませんし、それに念仏往生の本願に対する信心がなければ私は清沢師の言葉も理解できなかつたと思います。真宗の信心の智慧は非常に広い世界へと出してくださるのです。

そして清沢師の言葉がなぜ現代の私たちにとって大事かという、真宗が近代から現代へ、日本から世界に通じる教えとして説かれていくためには、清沢師の教えを通して真宗を味わっていくことが大切だと思ふからです。もちろん清沢師を是非とも通さなければならぬとまでは毛頭い

えません。しかし、近現代、さらには未来に真宗を語る場合、清沢師を通すことは有効であると考えます。もちろん清沢師に留まるのではなく、近代日本の優れた思想家である西田幾多郎や滝沢克己などから学んでいくこともよいと思います。

伝統的な真宗教義だけでは、現代において極めて大きな影響を与えている自然科学、そしてその他の領域、またキリスト教・イスラム教などの他の宗教とのであいなどにどう関係していくかという問題に充分応えていくことができないように思います。このことを根本からいえば、浄土真宗は「何を基礎とし、何を根本とし、何を確かな真実として教えが説かれていくのか」をあきらかにして、こういう問題に答えていかねばならない時代です。

ただ真宗の人たちの中だけで語り合うのなら伝統教の用語で話し合つてそれで間に合うでしょう。しかし、いつたん真宗でない人たち、世界の人たちとであつていくとき、「真宗の教えの確かな基礎は何なのか」は常に問われることとなります。それにどう答

えていくのかという課題がつきつけられます。

少し具体的に一例をあげれば、弥陀の本願の働き（本願力）は、大無量寿経の法蔵菩薩の願行とその成就の経説でもつぱら語られてきました。法蔵菩薩の願行のご苦労によつて、本願の名号が成就し、それが私たちに与えられ、それを信受することによつて助かるのであると説かれてきました。しかし真宗以外の人は「法蔵菩薩は実在の菩薩ですか？」「法蔵菩薩の願行成就の話はいわゆる「物語」ではないのですか。もし説話（あるいは神話）でしかないのなら畢竟アミダ仏の救いは確かな根拠のない作り話といわれませんか」と迫られかねません。

こうした問いに対してどう答えるのか、という問題がでてきます。現代という世界ではならぬ時代に真宗の普遍的な真実性をあきらかにすることは極めて大事なことだと思います。こういう問題にたいて道を開いてくださったのが清沢満之師であるといえ